会議終了後提出

資料 10

第２２回国際動物学会議および
第８７回日本動物学会年会合同大会
開催結果報告

１　開催概要

(1) 会　議　名　：　（和文）第２２回国際動物学会議および
第８７回日本動物学会年会合同大会
（英文）the 22nd International Congress of Zoology, the 87th Meeting of Zoological Society if Japan

(2) 報　告　者　：　第２２回国際動物学会議および第８７回日本動物学会年会合同大会
組織委員会委員長　武田　洋幸

(3) 主　　催　：　日本動物学会、日本学術会議

(4) 開 催 期 間　：　28 年 11 月 14 日（月）～ 11 月 19 日（土）

(5) 開 催 場 所　：　沖縄科学技術大学院大学（沖縄県恩納村）沖縄コンベンションセンター
（沖縄県宜野湾市）沖縄タイムスビル（沖縄県那覇市）

(6) 参 加 状 況　：　30 ヵ国/1 地域・人（国外 191 人、国内 922 人）

２　会議結果概要

(1) 会議の背景（歴史）、日本開催の経緯：

国際動物学会議は、国際動物学会（International Society of Zoolical Sciences, ISZS）が 4 年ごとに開催する国際会議であり、1889 年の第 1 回大会から、今回の会議で 22 回目を迎えた、動物学分野で最も歴史のある国際会議である（1970 年代に中断あり）。その長い歴史の中でも、日本での開催は今回が初めてとなった。我が国における動物学の研究水準は極めて高く、現在様々な分野で世界をリードしている。日本での開催は、世界の動物学者のたっての希望であり、日本動物学会は、2016 年に第 22 回国際動物学会議を国内の第 87 回年会と合同で開催することを決定し、2013 年 6 月北京で開催された ISZS 理事会で正式に承認された。組織委員会は、2013 年 10 月に発足した。

(2) 会議開催の意義・成果：

日本動物学会にとっても、また世界の動物学者にとっても、日本での開催は、熱望されていたところであった。それは日本動物学会が、140 年に及ぶ歴史を持つだけではなく、会員数 2350 名を擁し、動物学においては、世界規模でも大きな学会であるだけではなく、会員の専門分野が、多岐にわたるという点が大きな期待を寄せられる所以であった。会議は、その期待に応えるものであった。動物学の多くの分野を網羅する基調講演者による講演、次世代研究者をオーガナイザーとして開催された各種シンポジウムは、多くの参加者の待ち望んでいたものであったと言える。2000 年に約 30 年ぶりに再開された会議であるが、会議では、分野が限定されている感が否めなかった。今回の会議では、あらためて動物学とは何かを、そしてテーマである

21 世紀における動物学の在り方を再考する場となったと確信している。また、今回の特筆すべき結果は、次世代研究者の多くの参加であった。アジア若手動物学者の招聘など積極的に次世代研究者を呼び込む努力を行ったが、世界各国から、若手研究者の参加があったことは、素晴らしいことであった。

(3)　当会議における主な議題（テーマ）New Waves of Zoological Science in the 21st Century

(4)　当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割：(成果)

1 今後の動物学を検討する場の提供
2 若手動物学者の発表、交流の場の提供
3 世界 30 か国からの動物学者の参加を得たこと
4 各分野を代表する著名な研究者が、誰ひとりとして断ることなく講演を行い、
それを参加者が沖縄で聴く機会を創造できたこと
（日本が果たした役割）
多様な分野を内包する日本動物学会であるために、多様な分野の研究者を招聘することに成功した。そのことが、本来の動物学会議を復活させ、テーマに掲げた通りの新しい動物学への方向性を示すことができた。

(5)　次回会議への動き：
次回は、２０２０年　南アフリカ　ケープタウンと決定している。詳細な内容やテーマは未定である。南アフリカが目指す、動物生態や保護が中心となるだろう。

(6)　当会議開催中の模様：
○　どの会場も人が溢れたため、講演を他の教室へ流したり、様々なデバイスで講演を聴くことができるような措置を行ったりした。
○　沖縄科学技術大学院大学では、他の教授から、これほどまでに熱心で、盛り上がっている大会はなかったと感心されたとのこと。
○　写真を別紙添付

(7)　その他特筆すべき事項：
2013 年の ISZS 理事会で承認を受けたが、実際には、南アフリカが、突然立候補をし、日本と南アフリカとの「プレゼンテーション」により、沖縄での開催が決定された。沖縄の自然と生物多様性、そして、日本での初めての開催を強力にアピールした。プレゼンターは元動物学会会長、現 ISZS 副会長の長濱嘉孝会員によるものであった。

３　市民公開講座結果概要

(1)　開催日時：平成 28 年 11 月 19 日（土）
(2)　開催場所：沖縄タイムスビル
(3)　主なテーマ、サブテーマ：沖縄の動物再発見
(4)　参加者数、参加者の構成：
278 名（パンフレットの配布数から：実来場者はこれ以上あった）
小学生～成人まで多様な年令構成の参加者があった。
(5)　開催の意義：
日本動物学会では毎年全国大会において、開催地の子ども達や一般の方々に向けて公開事業を開催し、動物学研究の楽しさと重要性の理解を広げている。他の県から遠く離れた沖縄より本学会の公開事業に参加することは極めて難しいため、沖縄県では初めての公開事

業を開催した意義は大きい。

(6) 社会に対する還元効果とその成果：
公開講演では県民にとっても珍しい動物の映像が多数紹介された。高校生の研究発表では沖縄県の高校を含む全国21校の高校生がポスター発表を行い、交流する機会を提供できた。動物学ひろばの展示では動物（実物）を実際に観察し触れるこ　とで動物学研究の楽しさの一端を伝えた。公開事業のみ県民のアクセスを考慮して那覇しないで開催した。会場となった「沖縄タイムス」の協力で県民向けに公開講座を新聞記事として告知した。

(7) その他：
開催翌日に沖縄タイム紙の社会面で報道された。さらに、同紙の子供向け紙面「ワラミュー」において、開催の模様が紹介された（11月27日）。

４　日本学術会議との共同主催の意義・成果

(1) 動物学会は、合同大会開催にあたり、動物学を推進するという目的を第一義に置いた。そのため、我が国の科学者の代表機関である日本学術会議との共同主催は、必須のものであった。

(2) 日本学術会議との共同主催により、秋篠宮殿下に会場の OIST を視察していただけたのみならず、開会式にご参加いただき、自らのお言葉で殿下や天皇家の動物学との深い関わりや思い入れについて語ってもらうことができ、日本動物学会にとっても大変異議があった。

(3) 日本学術会議との共同主催により会場の使用料及び招待講演者の滞在費などを支援していただくことができ、大会の会計的な運用が大幅に楽になるだけでなく、国際的にも一流の講演者を招待することができて、学会の科学的なレベルを極めて高いものにすることができた。